

長野県文化財保護審議会への諮問について

文化財・生涯学習課

下記の文化財を長野県宝及び長野県天然記念物に指定したいので、文化財保護条例（昭和50年長野県条例第44号）第4条第3項及び第30条第2項の規定により、長野県文化財保護審議会に諮問する。

記

1 長野県宝に指定する文化財

名 称	員数	所 在 地	所有者の住所及び名称
もくぞうじぞうぼさつりゅうぞう 木造地藏菩薩立像	1 軀	長野市篠ノ井塩崎 878 番地	長野市篠ノ井塩崎 878 番地 宗教法人 <small>はせでら</small> 長谷寺
どうぞうあみだにょらい 銅像阿弥陀如来及び りょうわきじぞう 両脇侍像	3 軀	上田市中央2丁目 16 番 14 号	上田市中央2丁目 16 番 14 号 宗教法人 <small>がんぎょうじ</small> 願行寺

2 長野県天然記念物に指定する文化財

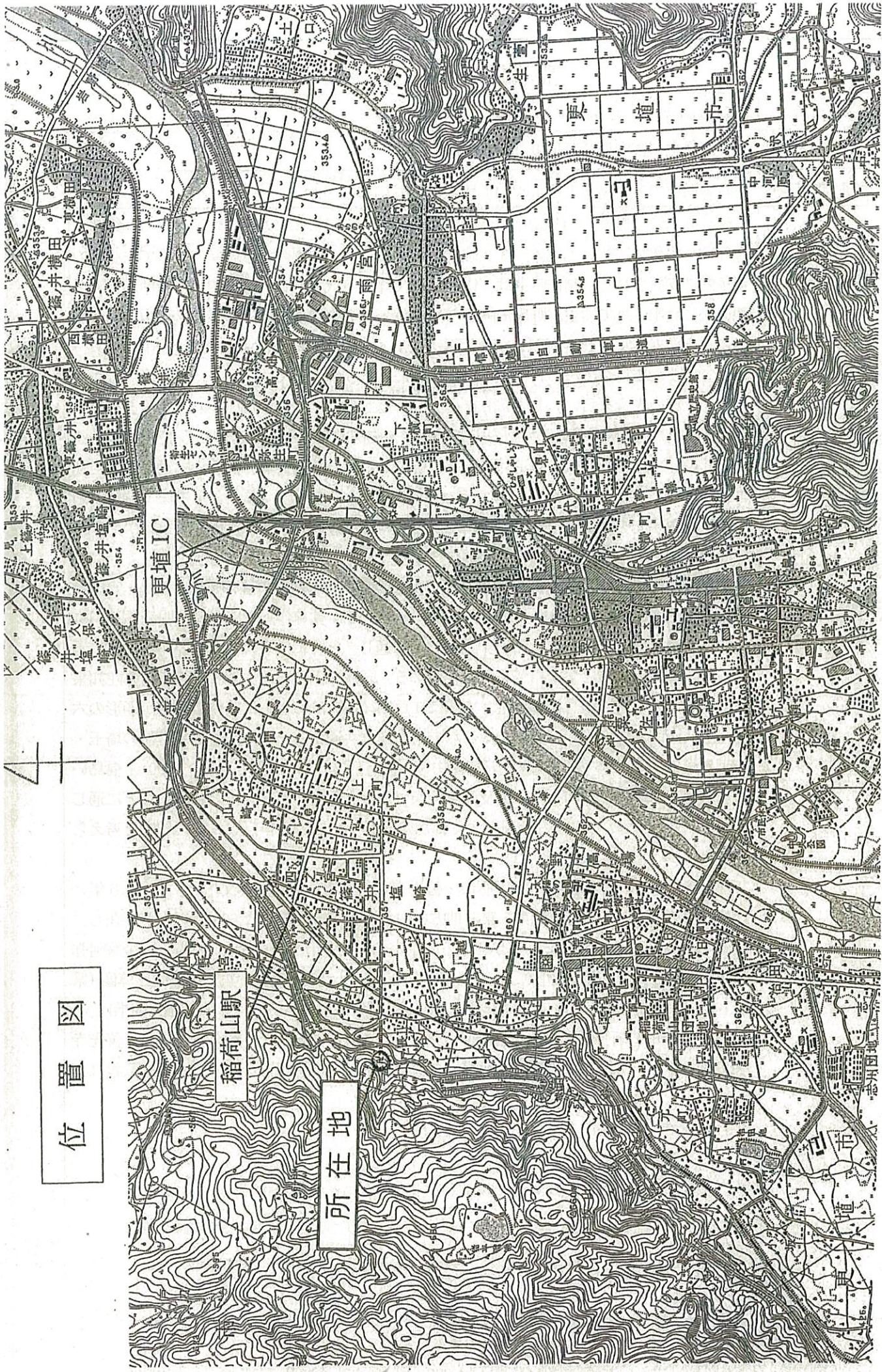
名 称	員数	所 在 地	所有者の住所及び氏名又は名称
<small>はげやま かざわ</small> 東御市羽毛山・加沢産 アケボノゾウ化石群	3 個体 (80 点)	東御市八重原 2164 番地	東御市 281 番地 2 東御市

諮 問 物 件 の 概 要

名称・員数	もくぞうじぞうぼさつりゅうぞう 木造地藏菩薩立像 1 軀
所在地	長野県長野市篠ノ井塩崎 878 番地
所有者の住所及び名称	長野県長野市篠ノ井塩崎 878 番地 宗教法人 ^{はせでら} 長谷寺
概況と特色	<p>篠ノ井塩崎・長谷寺の庫裏内書院に安置される地藏菩薩立像で、木造割矧造^{わりはぎづくり}※1、錆下地^{さびしたじ}※2彩色、玉眼^{たまのまなこ}嵌入、像高は79・5cmである。もと千曲市(旧更埴市)桑原・長福寺本尊であったが、同寺の廃絶により昭和三十七年に長谷寺へ移安された。長福寺は貞享元年(1684)の火災で、本堂・庫裏を焼失し、確かな創建年代や本尊の伝来について知る史料に乏しく、本像が近在の他寺から長福寺へ移安されたことも考えられる。</p> <p>像は頭頂から台座の蓮華部^{れんげぶ}底面までを約90cmとするやや小ぶりの三尺立像で、剃髪・僧形、左手に宝珠^{ほうじゆ}※3、右手に錫杖^{しゃくじょう}※4をもつ姿の地藏菩薩立像である。積尊滅後から弥勒出現までの間、六道を輪廻する衆生を救済する代受苦の菩薩として、また辻堂等にある結界の守護神として、平安後期以降、浄土信仰とともに造像が盛行した。</p> <p>品質構造は檜材とみられる割矧造で、頭体幹部を耳のすぐ後で前後に割矧ぎ、内削り、割首を施し、玉眼を嵌入する。左右の肩先に幅1.5cmのマチ材を挟んで両側材を矧ぎ、内削りし、内袖、袖口、背面上半、両手先、両足先を矧ぐ構造である。内衣^{ふくけんえ}、覆肩衣^(ふげんえ)、偏袒右肩^{へんたんうけん}※5に着けた吊袈裟^{つりげさ}、袴^{くん}※6を着す形姿は、快慶作の奈良・東大寺地藏菩薩立像(重要文化財、1203～1208間)以降にあらわれる形制で、さらに鑲^{かん}※7を用いている点では神奈川・満願寺地藏菩薩立像(重要文化財、13世紀初、慶派)に共通する。主に慶派仏師から用いられ始めた鑲袈裟形式の比較的早い作例であり、慶派仏師の作とみてよいものである。慶派としてはやや異色の浅く穏やかな胸腹部^{いへま}の衣襷^{たんけい}※8は、湛慶^{たんけい}※9作の高知・雪隠寺吉祥天^{せつげんじ}・善膩師童子像(ともに重要文化財、1225年頃)に連なるものとみられる。頭部の形や理知的な相好は京都・六波羅蜜寺地藏菩薩坐像(重要文化財、12世紀末、運慶作)や静岡・岩水寺地藏菩薩立像(重要文化財、1217年頃、運覚^{うんかく}※10作)など、運慶系の作風に近く、これに和様のおだやかさが加わり、全体に体軀の量感がやや減じて小作りである点に、年代の下降がうかがえる。その静かな作風、工夫された現実感ある衣文表現や形姿の完成度から、湛慶や運覚に連なる慶派の中心的な仏師により、13世紀前半も第1四半期以後に造られた像とみられる。</p> <p>長野市文化財指定日 昭和42年11月1日</p> <p>※1：寄木造に用いる技法の一つ。木を割って内側を削りぬいた部材をつぐ技法。 ※2：漆塗り下地の一つ。 ※3：願いをかなえる効果があるとされる。 ※4：煩惱を除去し智慧を得る効果があるとされる。 ※5：僧が相手に恭敬の意を表す袈裟(けさ)の着方で、右肩を肩脱ぎにし、左肩のみを覆うこと。 ※6：すそ。もすそ。 ※7：わ。かねのわ。 ※8：衣のひだ。衣紋。 ※9：慶派仏師、運慶の子 ※10：慶派仏師</p>

<p>諮問理由</p>	<p>本像は鎌倉時代12世紀末から13世紀初め以降、慶派仏師を先駆として始まった新しい着衣形式（内衣＋覆肩衣＋鍔袈裟）による地藏菩薩立像の比較的早い作例で、13世紀前半（第1四半期以後）に遡る慶派仏師による優作である。以後、同形式が流派を超えて用いられ、さらに多様化してゆく過程における一典型作品と位置づけられる。運慶・快慶の作を踏まえながら、一部に和様回帰も認められる静かで穏やかな作風は、運慶次世代の新傾向の一つでもあり、高い作行きを示す作例として注目される。伝来を詳らかにしないものの、慶派作品をその権威の徴標としたとされる鎌倉幕府・北条得宗家や小笠原氏等、御家人勢力の配下にながくあった当地域の、仏像受容の傾向や信仰史を示す資料としても重要であり、県宝指定に相応しいと考えられる。</p>
<p>指定基準</p>	<p>第1 長野県宝の指定基準 (1) 絵画及び彫刻 ア 各時代の遺品のうち、製作優秀なもの イ 歴史上特に意義のある資料となるもの</p>
<p>参考文献</p>	<p>長野県長野市長谷寺地藏菩薩立像調査書（熊田長野県文化財保護審議委員） （調査年月日 H27. 11. 16）</p>





位置図

更埴 IC

稲荷山駅

所在地

1 : 25,000



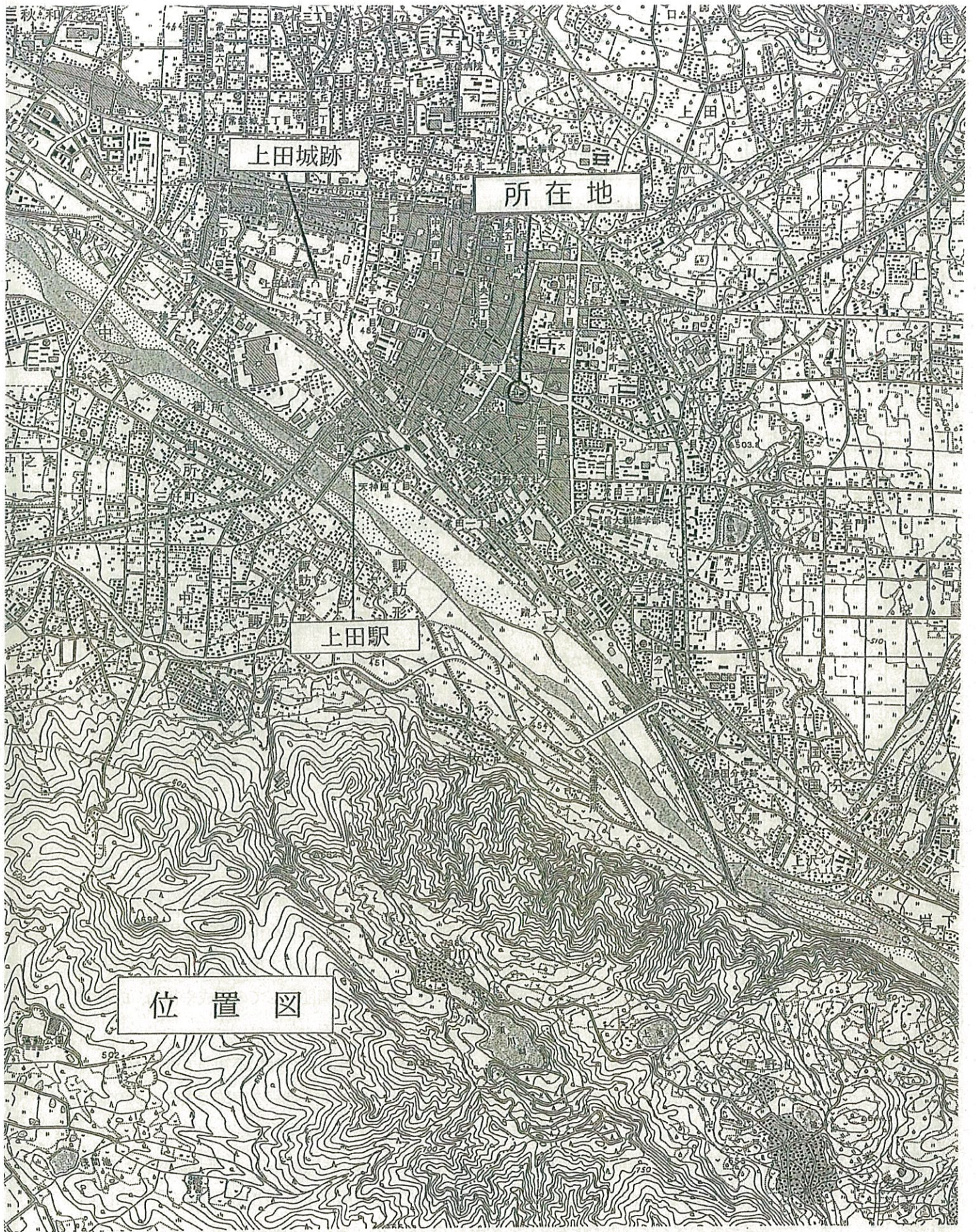
4

諮問物件の概要

名称・員数	銅造阿弥陀如来及び両脇侍像 3 軀
所在地	長野県上田市中央 2 丁目 16 番 14 号
所有者の住所及び名称	長野県上田市中央 2 丁目 16 番 14 号 宗教法人 願行寺
概況と特色	<p>願行寺本堂の奥殿（須弥壇中央背後）に納められる秘仏本尊の阿弥陀三尊像で、銅造、像高は、中尊 47.5cm、左脇侍 33.2cm、右脇侍 32.2cm、開帳時には本堂向かって左脇壇の厨子内に安置される。制作時期は、13 世紀末で鎌倉時代である。寺伝では、千曲川の淵で地元民に見出されて領主滋野氏に献じられ、嫡流・海野小太郎（1172-1250 以降）所伝とされる像で、天文十年（1541）の願行寺焼亡にも救出されたといわれるが、同寺の火災・移転で確かな史料類は失われており、その伝来は詳らかではない。</p> <p>一光三尊の光背を負い、中尊が衲衣※1を通肩※2に着け、左手を刀印※3、右手を施無畏印※4に結び、両脇侍菩薩が大型の山形冠を戴き胸前で両掌を重ね合わせる梵篋印※5を結ぶ、いわゆる善光寺式の銅造阿弥陀三尊像である。三尊は材質、面貌の共通性から当初より一具であったとみられる。それぞれ前後の合わせ型を用いて頭から足柄までを同鑄とし、中尊両手先を別鑄とする。その鑄上がりは非常に良好であるが、火中の痕跡があり、表面の鍍金や彩色は現状では確認できない。</p> <p>中尊の肉髻が低平で、髮際の中央を強く弛ませる特徴や衲衣の髷形式は、広島・安国寺木造阿弥陀三尊中尊像（重要文化財、文永十一年/1274 覚尊作）や埼玉・光明寺銅造阿弥陀如来立像（重要文化財、永仁三年/1295）に通じ、とくに前者は左右の脇侍が上下に重ねる掌をそれぞれ逆にする相が本像に共通する。同様の例である滋賀・安養寺阿弥陀如来立像（重要文化財、鎌倉後期推定、中尊は江戸期後補）は、さらに脇侍の宝冠が通形の六面乃至八面筒形ではなく四面形である点でも本像と共通する。その面貌は、上記の埼玉・光明寺像や千葉・修徳院阿弥陀三尊像中尊（県有形文化財、正応三年/1290）、福島いわき市蔵・如来寺銅造阿弥陀如来及両脇侍像（重要文化財、嘉元二年/1304）などに通じるが、やや簡明でのびやかな余風とすぐれた鑄上がりから、制作年代は 13 世紀末と考えられる。</p> <p>善光寺式阿弥陀三尊は、山梨甲府市・善光寺式阿弥陀三尊（重要文化財、建久 6 年/1195）像を最古例として、関東・東北地方を中心とする全国各地に 600 例以上が存在し、県下では約 40 点が知られているが、県下の指定例は長野市・善光寺前立本尊（＝金銅阿弥陀如来及両脇侍像、重要文化財、鎌倉～南北朝時代）、小諸市・大雄寺銅造阿弥陀三尊像（県宝、1244/寛元 2 年）、佐久市・安養寺木造阿弥陀如来及両脇侍像（県宝、鎌倉前半）、小谷村常法寺銅造阿弥陀如来及両脇侍像（県宝、鎌倉後期）と極めて限られている。善光寺信仰の受容を示す善光寺式阿弥陀三尊像の造像状況と水準を明らかにする歴史的意義は大きい。</p> <p>上田市文化財指定日 昭和 43 年 4 月 25 日</p> <p>※1：僧尼が身に着ける袈裟（けさ）。 ※2：僧の袈裟（けさ）の着方で、両肩をおおって着ること。 ※3：右手の人差し指と中指を垂直に立て、その他の指を硬く握りこんだ形態。災いや不幸を斬る意。 ※4：「恐れなくてよい」と相手を励ます印。 ※5：梵篋（ぼんきょう） 経典を納める箱のこと。</p>

<p>諮問理由</p>	<p>県下の善光寺式阿弥陀三尊像中でも^{いはだ}鑄肌が良好で、13世紀末に遡る作とみられ、市指定（昭和43年）の作例中でも早くに注目されていた像である。脇侍の梵篋印の重ね合わせ方、四面形宝冠などは全国的にも稀有な例であり、「善光寺式」の多様な系統、受容と変容の解明に資するものである。善光寺信仰の中心地・県下の善光寺式阿弥陀三尊像として、その水準を明らかにする貴重な作例であり、県宝指定にふさわしいと考えられる。</p>
<p>指定基準</p>	<p>第1 長野県宝の指定基準 (1) 絵画及び彫刻 イ 歴史上特に意義のある資料となるもの ウ 題材、品質、形状又は技法等の点で、顕著な特性を示すもの</p>
<p>参考文献</p>	<p>長野県上田市願行寺阿弥陀如来及び両脇侍像補調書（熊田長野県文化財保護審議委員） （調査年月日 H27. 11. 17）</p>





1 : 25,000

500m 0 500 1000 1500

4

9

諮 問 物 件 の 概 要

名称・員数	東御市 <small>はげやま かざわ</small> 羽毛山・加沢産アケボノゾウ化石群 3個体 (80点)
所在地	東御市八重原2164番地 東御市北御牧郷土資料館
所有者の住所 および氏名	東御市県 281 番地 2 東御市
概況と特色	<p>アケボノゾウ (<i>Stegodon aurorae</i>) は、200万年前～100万年前に生息していた比較的小型のゾウであり、日本の各地でその化石が発見されている。模式標本は石川県室山産とされている。ほぼ全身骨格がそろった標本は、三重県員弁町 (現いなべ市：1954年)、明石市西区伊川谷町井吹 (1983年)、狭山市笹井 (1985年：2003年に埼玉県天然記念物) 滋賀県多賀町 (1993年) などで発見されている。幼体の化石は東京都昭島市拝島町 (1998年) から頭骨化石1点が発見されている。</p> <p>当該標本は、アケボノゾウに同定されている頭骨、切歯、臼歯、肋骨、脊椎骨などの化石である。アケボノゾウ化石は、平成4年 (1992年) に発見され、平成5年 (1993年) 以降、10回にわたる発掘調査により多くの化石が発見されている。調査は、旧北御牧村が組織した北御牧村アケボノゾウ発掘調査団が実施し、市町村合併後、東御市北御牧アケボノゾウ発掘調査団が引き継いでいる。平成19年からは、調査団から発展的解消を遂げた「アケボノゾウの会」が中心になって、アケボノゾウ化石とそれとともに産出する動植物化石の保存と整理活動を行っている。一連の調査で収集・整理された化石は、第1個体33点、第2個体32点、第5個体15点である。収集された標本は、北御牧郷土資料館に整理されて保管され、切歯や臼歯の良品は展示されている。</p> <p>アケボノゾウ化石群は、いずれも半径数 km 以内の小諸層群大杭累層上部層 (鮮新世～前期更新世) から産出している。特に、東御市羽毛山と加沢の千曲川河床からは、少なくとも3個体以上の化石が近接した位置から発見されている。河床の地層には複数個体のゾウが歩いた足跡も残されており、一群の個体集団に由来する化石である可能性が高い。また、これまで日本では産出報告がない、同一個体に由来すると考えられる幼体の複数の化石を含む。これらの特徴は、この化石動物群が集団としての構成や行動、成長などアケボノゾウの生態を解明する鍵になる可能性がある。</p> <p>アケボノゾウの全身骨格の標本は、長野県内では羽毛山での産出が初めてであるとともに唯一である。標本の豊富さと保存の良さとともに、成長過程を追跡できるゾウの集団としての特徴を残す化石群であることが学術的に高い価値をもたらしている。</p> <p>長野県では、東御市羽毛山・加沢の他、その産出層 (大杭層上部) の延長部にあたる上田市塩川からも産出しており、飯山市湧井南沢の猿丸層からの産出報告がある。しかし、それらの多くは臼歯の化石として産出しているものであり、全身骨格に相当する化石および幼体化石は羽毛山および加沢以外では発見されていない。</p>

<p>諮 問 理 由</p>	<p>アケボノゾウの全身骨格の標本は、長野県内では羽毛山での産出が唯一であり、幼体の産出は初めてである。標本の豊富さと保存の良さとともに、成長過程を追跡できるゾウの集団としての特徴を残す化石群であること、また、集団としての構成や行動、成長などアケボノゾウの生態を解明する鍵になる可能性がある等、極めて学術的価値の高い資料群である。これらのうち、成体全身骨格の2個体（1号個体・2号個体）と遺存状況の良好な幼体個体（5号個体）は特に貴重であり、長野県の天然記念物に相応しい化石群と考えられる。</p>
<p>指 定 基 準</p>	<p>第8 長野県天然記念物の指定基準 (3) 地質鉱物 カ 標本</p>

(参考)

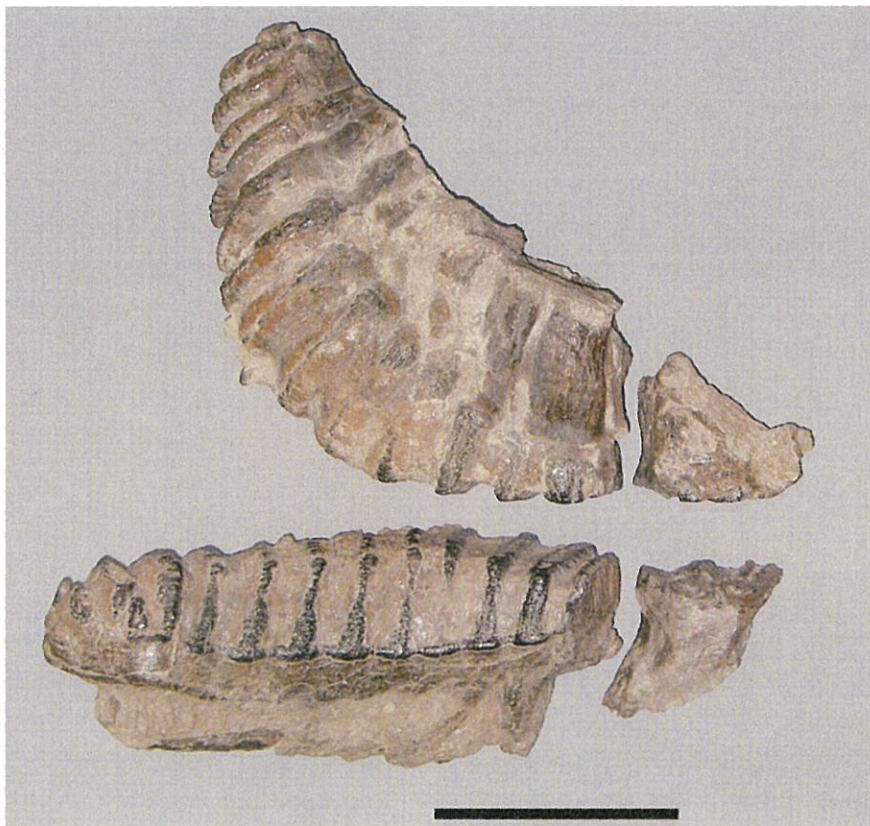
- ・第1号個体と第2号個体化石は、平成16年3月25日に東御市天然記念物に指定されている。



アケボノゾウの骨格標本



第1個体の臼歯と切歯



第2個体 右 上下第2・3大白歯

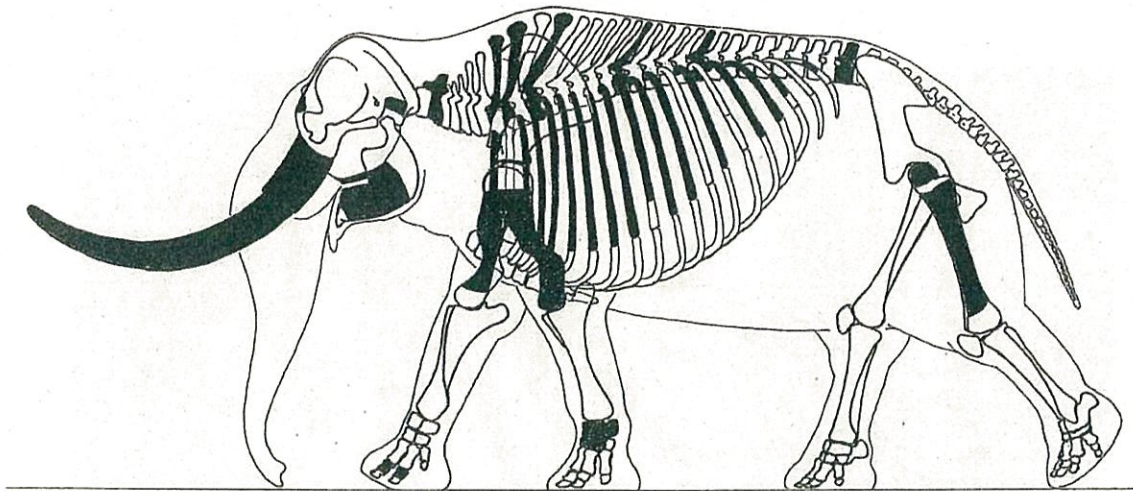


復原模型

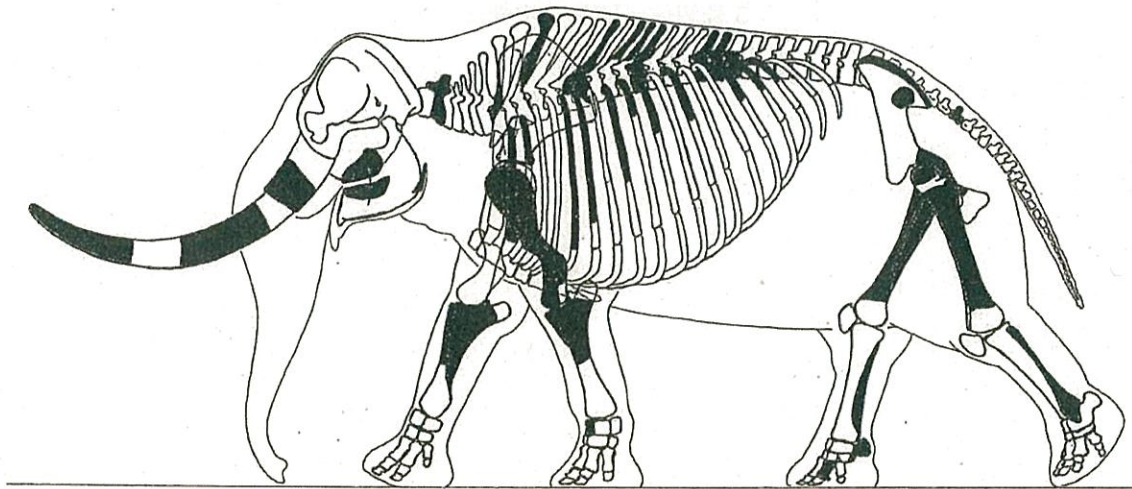


5号個体 切歯・椎骨ほか

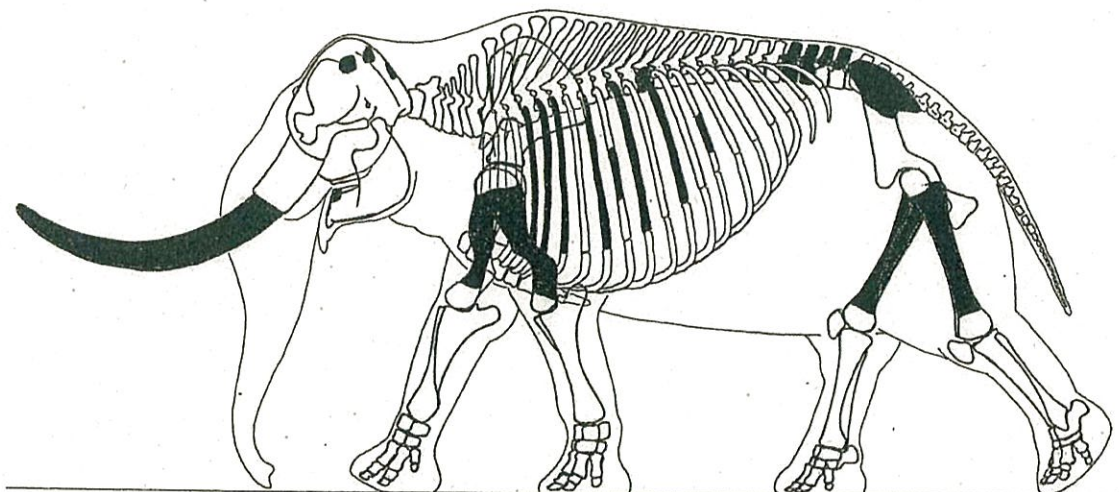




アケボノゾウ羽毛山第1個体の産出部位。(骨格)
黒く塗った部位が産出した。



アケボノゾウ羽毛山第2個体産出部位
黒い部分が産出した (小西, 2000に加筆)



アケボノゾウ羽毛山第5個体の産出部位。(骨格)
黒く塗った部位が産出した。(小西, 2000に加筆)

位置図

東御市役所

アケボノソウ化石群産出地

東御市北御牧郷土資料館

1:25,000

